

古都トレドの歴史と伝説を訪ねて

(下)

佐藤 玖美子

スペインはイスラムの支配下に置かれたことで、イスラムの勝れた文化の恩恵に浴すことができたが、トレドももちろん例外ではなかった。12世紀に、トレドにはすでにイスラムの考案で、タホ川の水を汲み上げて、近くの畑や果樹園をかんがいする水道が引かれていたと言われる。このイスラムのかんがい技術によって、イベリア半島の南部は豊かな農業地帯となり、また彼らによって、米、さとうきび、綿花、その他種々の野菜や果物がスペインにもたらされた。そのイスラムの勝れた科学、学問の影響の一つと言えるのが、有名なトレドの翻訳工房である。トレドには、ここを支配していたイスラムの王達が、いづれも大の本好きであったために、アラビア語で書かれた書物の大きな図書館がいくつもあり、またイスラム教徒の中には沢山の東洋の書物を集めていた人もあったと言われる。そしてイスラム側の敗北によって、これらの本がキリスト教徒の手に渡ったわけだが、その学問を生かすことを知っていたのは、当時トレドに大勢住んでいたユダヤ人であった。翻訳工房 (Escuela de traductores) とは、escuela、つまり“学校”を意味する言葉が使われているが、実際には学校というよりも、ギリシャ、アラビアの学問を研究する研究所といったところであった。創始に当たっては、トレド再征服後2人目のトレド大司教であり、かつアルフォンソ7世の国じ尚書官であったライムンドが大きな役割を果たしている。この工房では何人もの翻訳家が働いており、医学、数学、物理学、天文学、論理学、政治学、錬金術等についての数多くのアラビア語で記された書物が、ラテン語に翻訳された。そして、このギリシャ・オリエント文化の大

佐藤

きな中心に引き寄せられて、イギリス、フランス、ドイツ、イタリアなどから、学者や学生がトレドに集まった。つまり、この翻訳工房で訳されたアラビア語の図書を介して、人々はイスラム文化ばかりでなく、古代ギリシャの学問をも大いに学ぶことができたのであった。

この翻訳工房の仕事は、アルフォンソ7世から約100年後のアルフォンソ10世賢王によっても奨励され、セビリャやムルシア、タラゴナ、バルセロナに迄このような工房が作られたという。つまり、この時代はカスティリャにとって一つの絶頂期であり、軍事的な征服運動よりも、文化活動に熱心であったすぐれた時代と言える。そして、こうして再びキリスト教徒の王国の主たる座を占めたトレドは、イスラム文化を、イベリア半島の他の地域のみならず、ヨーロッパ諸国とも結びつける最も重要な中心地となったのである。

一方、イスラムとの戦いの方は、カスティリャ王アルフォンソ2世が、トレドで強力な軍隊を編成し、アラゴン王ペドロ2世と、ナバラ王サンチョ7世との連合軍によって1212年、アルモアデの軍隊を、アンダルシア地方のハエンの近くにあるナバス・デ・トロサの戦いで打ち破り、以後キリスト教徒側の勢力は圧倒的に優勢となっていった。

このアルフォンソ7世は、長男のサンチョ3世にカスティリャを、弟のフェルナンド2世にレオンを与えたので、レオンとカスティリャは再び別々の王国となる。ところが、サンチョ3世の息子、アルフォンソ8世の娘ベレンゲラは、ドイツ皇帝の息子と結婚していたが、トレドの大司教にこれを解消させられ、レオン王フェルナンド2世の息子のアルフォンソ9世と結婚する。そして、これによってカスティリャとレオンは、以後永久的に合体することになる。この結婚から生まれた息子はフェルナンド3世聖王で、その息子が有名なアルフォンソ10世賢王である。

ソコドベル広場から西南に延びる土産物屋で賑わう商店街を少し行くと、トレドのカテドラルの横に出る。このカテドラルの最初の礎石は1226年、それより14年前に勝ち取ったナバス・デ・トロサの大勝利を記念して、フェルナンド

古都トレドの歴史と伝説を訪ねて（下）

3世聖王（1199～1252。前述のレオン王アルフォンソ9世の息子。叔父のカスティリャ王エンリケ1世の王位を継承し、父の死後カスティリャのレオン王国を再統一する。更にコルドバ、セビリャ、ムルシア、ハエンを征服し、グラナダのイスラム王を臣下としていた。カスティリャ語を王国の公用語としたのはこの王である）によって置かれたものである。この同じ場所には6世紀、レカレド王の治世に、トレド初代司教のサン・エウヘニオによって創設された寺院があり、その後イスラム教徒によって、モスクとして使用されていたものが、キリスト教徒の再征服により1085年に返還され、これを壊していまのカテドラルが作られたと言われる。このカテドラルは266年の歳月をかけて1493年に完成して居り、ゴシック建築の最盛期に建築が始められたが、ルネッサンスやチュリンゲン様式などの要素が加わっている。このカテドラルはヨーロッパで最も美しいカテドラルの一つと言われているが、狭い道に囲まれているために、全体を眺めることは残念ながら不可能である、しかし、夜、日が落ちてからの散歩で、狭い道に立ち並ぶ家家の間から、全く思いがけず突然青白い照明で浮かびあがるカテドラルの塔の美しさは想像に絶するものであった。

さて、アルフォンソ10世賢王から4代あとのアルフォンソ14世の時代となると、せっかく盛り上っていた文化活動は尻つぼみとなり、個人的な利害が渦巻く時代となる。残酷王と呼ばれるペドロ1世（1334～1369）を戴くトレドは、王の妻であるボルボン家のシャルル5世の妹、ドニャ・ブランカをめぐる、荒れ狂う動乱の舞台となった。このドニャ・ブランカは、ドン・ペドロとの結婚2日目で夫である王に捨てられ、あちこちの城に閉じ込められて、最後にはトレドの王宮に幽閉される。トレドの人々は彼女に同情し、また恐らくはペドロの反対派に扇動されて、応援にトラスタマラ兄弟の一人、ドン・ファドリケを呼び寄せる。トラスタマラとは、スペイン中南部のシウダード・レアル県の東南部一帯の地名で、トラスタマラ兄弟とは、アルフォンソ11世（1311～1350）の8人の庶子のうちの一番上の双子の兄弟、エンリケとファドリケのことである。アルフォンソ11世は正妻のマリア・デ・ポルトゥガルとの間にペドロ1世

佐藤

しか生まれなかったが、セビリャの名門の娘で、王国一の美女とうたわれた、未亡人のドニャ・レオノール・デ・グスマンと恋仲になり、彼女との間に8人もの庶子をもうけた。その一番上の双子の兄弟がエンリケとファドリケの兄弟である。そしてエンリケの方がアストゥリアス伯のロドリゴ・アルバレスの養子となり、トラスタマラを受け継いだことから、トラスタマラ兄弟と呼ばれるようになった。

一方嫡子のペドロは16才で王位につき、政治の実権は母がポルトガルから連れて来た、ホアン・アルフォンソ・デ・アルブルケケ伯が握っていた。しかし、彼の政策は歴史的にすべて誤算だらけで、その大失敗の一つがそれ迄アルフォンソ11世が慎重に保って来たイギリスとの友好関係を捨てて、フランスと結び、そのためペドロをボルボン家の娘ブランカと結婚させたことである。しかも、アルブルケケは、それより前にペドロをマリア・デ・パディリャという女性にひきあわせていたので、この女性に心を奪われたペドロは、結婚式の2日後にこの女性のもとに走ってしまう。アルブルケケはこの事件で失脚し、ポルトガルに逃げ帰るが、ブランカは幽閉されたまま生涯を終え、このためスペインとフランスの友好関係は完全にこわれる。

さて、兄のエンリケとサンチャゴ軍団の団長となっていたファドリケ、それにポルトガルから戻って来たアルブルケケが加った軍団がトレドに到着すると、ユダヤ人、サムエル・レビ（1320～1369。1350年からペドロの侍従長となり、国の財政をとりしきった。ペドロに寵愛され、トレドで大邸宅に住み、王のような生活を送っていたと言われる。最後に、多くの敵対者に中傷され、投獄されたすえ、殺害された。）の模大な財産を奪い、その富を利用して反乱をなお一層拡大することに成功する。ペドロはサモラのトロで捕りよ同然の生活を余儀なくされ、一味の者たちは散り散りになった。トラスタマラは双子の兄弟エンリケを伴って再びトレドに入り、ユダヤ人街を目茶目茶に略奪したが、トロを逃げ出した王がトレドを奪回し、エンリケはアストゥリアスに逃げ帰り、更にフランスに渡る。その後エンリケはアラゴンに赴き、アラゴン王ペドロ4世に仕えるが、内輪もめが起り、1362年再びフランスへ行く。そして、「白い

古都トレドの歴史と伝説を訪ねて（下）

軍団」と呼ばれるフランスの傭兵部隊の援助を得、またフランスのシャルル5世も彼に船隊を提供したので、エンリケの勢力は増大し、ついに1366年カラボラで自らをカスティリャ王と宣言する。一方ペドロ1世はセビリャに逃れ、ポルトガルに援助を求めるが得られず、英国の黒太子（エドワード3世の皇太子、Edward of Cornwall. 父王より早く死んだので、国王になっていない。黒いかっちゅうをつけていたことから、black prince と呼ばれた）と条約を結ぶ。これにより、イギリス軍がスペインに侵入し、1367年ナヘラの戦いでエンリケを打ち破り、ペドロを再び王座につける。エンリケは再びフランスへ行き、新たに強力な軍隊を用意するが、ペドロの残忍さと約束不履行に腹を立てた黒太子は軍隊をひき上げてしまい、ペドロの勢力は弱まる。1368年4月トレドの包囲戦が始まり、ペドロはわずかな軍勢で救援に赴くが、エンリケに打ち破られ、逃亡の手筈の交渉中に、招き入れられた白い軍団の陣営で殺害された。トレドは1年近く包囲に抵抗するが、その後新しい君主エンリケ2世に降伏する。こうしてエンリケは私生児で傍系であったにも拘らず、カスティリャ王エンリケ2世となり、トラスタマラ朝が開かれる。この開始を1368年とすると、以後カトリック王フェルナンドの死の1516年迄、148年間にわたり、トラスタマラはスペインの王朝を独占することになる。しかし、カトリック両王フェルナンドとイサベルの息子は19才の若さで死に、その後男子が生まれなかったために、トラスタマラ家系は途絶え、娘ホアナの嫁入り先のパプスブルグ家が次のスペイン王朝の担い手となるのである。

カテドラルの正面にある、エル・グレコの息子、ホルヘ・マヌエル・テオトコプリの建築による市役所の横を通り、サン・サルバドール通りからサント・トメ通りに入る。この通りから左に、つまり南に折れた左側に、グレコの傑作“オルガス伯の埋葬（この絵の下に1323年に死んだオルガス伯の墓がある。伝説によると、伯の埋葬のために、この教会に聖アグスティンと聖エステバンが空から舞い降りて来たといわれ、この絵はその場面を描いたものである）”がかかるサント・トメ寺院がある。そしてこの寺院の少し先にあるカサ・デ・グ

レコ（グレコの家）は復元されたものではあるが、前述のユダヤ人、サムエル・レビの大邸宅の一部であったものである。一階は当時の生活をほうふつとさせる家具、調度品を置いた居間、タイル張りの台所、中庭があり、二階はグレコの有名な“トレドの展望と地図”、使徒たちの肖像などの作品及び彼の追随者達の作品が展示されているが、グレコはこの家には一度も住んだことはなかったと言われる。サムエル・レビの時代には、このあたりにユダヤ人街があり、1万2千人ものユダヤ人が住んでいた。このカサ・デ・グレコに向ってすぐ左側に建つシナゴガ・デル・トランシト教会（1492年のユダヤ人追放で、キリスト教のトランシトの聖母を奉る教会、サンタ・マリア・デル・トランシトに変えられた）など、トレドにあったいくつかのユダヤ教会は、サムエル・レビによる建立と言われる。現在この教会は、四面の壁が残るだけだが、その壁にほどこされたムデハル様式の石膏製の唐草模様の装飾はすばらしい。この教会の左手を通るレイエス・カトリコス通りを西に進むと、現在残るもう一つのユダヤ教会、サンタ・マリア・デ・ブランカがある。ユダヤ人追放以前には、ユダヤ教会はトレドに8つあったと言われるが、現在残るものはこの2つだけである。この教会は、1180年に創立、しかし1250年から1300年にかけて再建され、1405年からはキリスト教会になっている。典型的な回教建築で、内部はコルドバのモスクを思わせるような馬蹄形アーチを形造っている32本の柱があり、わらびの頭をいくつもからみ合せたような石膏の柱頭が美しい。床は昔はタイル張りだったが、現在は破損してほとんど大部分が練瓦に変えられているのが残念である。この道をそのまま続ければ、左側に先に述べたサン・ホアン・デ・ロス・レイエス修導院があるのだが、今はもと来た道をカテドラル迄ひき返すことにしよう。サンタ・イサベル廣場迄南下すると、例の悪名高い残酷王ペドロ1世の館といわれるムデハル様式のドン・ペドロ王邸がある。

ソコドベル広場に戻り、ラス・アルマス坂を下る。右側に展望台があり、ここから岩山の下に広がるトレドの町や遠くの野や丘が一望できる。この展望台のあたりに、アルフォンソ10世賢王が生まれた（1221年）邸があったといわれるが、今は奥に県立図書館があり、その前の広場は野外映画館になっている。

古都トレドの歴史と伝説を訪ねて (下)

さて、ラス・アルマス坂に戻って、これを更に下ると、太陽の門、プエルタ・デル・ソルに出る。マドリードの方から来れば、ビスグラ新門をくぐって少し進むとこの門の前に出る。現在の門は14世紀に再建されたものといわれるが、古くからここには城門が設けられ、ビシゴート族やビザンチン、より古くはペルシャやローマ人によって使用されていたと伝えられる。今の門には入口の頭上に太陽と月の彫刻があり、そのために太陽の門と呼ばれるが、古くはプエルタ・バハ・デ・ラ・エレリーア（鍛冶屋の下門）という名であった。城門の上部にはパラペットがつけられ、向って右側の塔は四角形で、そこから城壁がのび、前述のバルマルドン門へつながっている。左側の塔は半円形になっており、そのアンバランスが非常に美しい。入口はカーヴの異なる2重の馬蹄形アーチになっており、真中の天井に先の尖った鉄のびょうのついた落し戸が巻き上げられているのが見える。13世紀後期のアラブ・スペイン建築の傑作とされるほど美事な城門である。前に紹介した、このすぐ右隣りにあるクリスト・デ・ラ・ルス修導院の庭の隅からこの城門の上層の階に上る階段がある。狭い石の階段を上ると、6畳ほどの広さの空間が、今は居間風にじゅうたんが敷かれ、ソファーなどが置かれている。小さな窓からはこの門をくぐって城内に入る道が眺められ、その窓の下には木で蓋がされた四角い穴が開けられている。案内人の説明によると、戦の時にはそこから城門をくぐる外敵にむかって煮えた油をかけたと言う。更に石の階段を登ってゆくと、パラペットに囲まれた城門の頂上に出る。ここからトレドの岩山の下に広がる白茶けた家や、赤い瓦屋根、ビスグラ門、青くよどんだタホ川などが一望のもとに見渡せる。

さて、トラスタマラ朝の創始者となったエンリケ2世の後、ホアン1世、ホアン2世の治世が続く。ホアン2世（1405～1454）と従妹のマリア・デ・アラゴンとの結婚でエンリケ4世が生まれるが、マリアの死後、ホアン2世はイサベル・デ・ポルトガルと再婚し、後のカトリック女王イサベルが生まれる。1454年にホアン2世が死ぬと、息子のエンリケ4世が王位を継ぎ、2度目の結婚相手となったポルトガル王アルフォンソ5世の妹、ホアナ・デ・ポルトガルとの

佐藤

間にはじめて女子が誕生する。彼女はマドリードで召集された議会で王位継承者として承認されたが、彼女は実はエンリケ4世の寵臣ベルトラン・デ・ラ・クエバと王妃ホアナとの間の子であるといううわさが流れ、ベルトラネハと呼ばれた。エンリケ4世は中世スペインでもっとも馬鹿にされた王、と言われるが、はじめ、カスティリャ王国とナバラ王国との連合を強めるために、ブランカ・デ・ナバラと結婚し、子供ができず離婚する。そして、ブランカが処女のまま離婚されたと噂され、2度目の結婚ではじめてできた子供は、エンリケ4世の実の子ではないといううわさが立てられた。このうわさは、王反対派の工作という感じもある。というのは、エンリケ4世は、改宗者や二流貴族にまで協力を求めたため、その革新的なやり方に貴族たちの反発が起りはじめていたからである。その反対派の一人はトレドの大司教のアルフォンソ・カリリョで、彼はポルトガルの名門の出身であったが、聖書よりも剣を好む、という性格の持ち主でエンリケ4世の父、ホアン2世にとりたてられ、トレド大司教の地位を得ていた。はじめはエンリケ4世の寵臣だったが、やがて王から離反して、反対派にまわる。その原因の一つは、例のベルトラン・デ・ラ・クエバという二流貴族が王の寵臣になったのを恨んだためといわれる。そしてエンリケ4世は遂に反対派に屈し、娘ホアナを自分の弟のアルフォンソに嫁がせ、アルフォンソを王位継承者にすることを承継させられる。この時に行われた有名なできごとは“アビラの道化芝居”と呼ばれるが、それは、1465年、反対派たちがアビラに集って舞台を作り、その上にエンリケ4世の人形を置き、その前で告発文を読み上げ、人形から王冠や王剣、王杖などをもぎとり、最後に人形を床に叩きつけ、その場で弟のアルフォンソにカスティリャ王の名のりをあげさせたという。しかし、この新王アルフォンソは若くして没し(1468)、反対派たちは、王位継承権をエンリケ4世の義母兄弟のイサベルにもって行った。イサベルはエンリケ4世の承認なしには受けられないと答え、1468年、トロス・デ・ギサントでエンリケ4世と会見して、彼の承認なしでは結婚しないという条件で、継承者として認められる。この時、エンリケ4世は、彼とホアナ・デ・ポルトガルとの2度目の結婚は正当ではないので、娘ホアナは庶子であり、継承権はな

古都トレドの歴史と伝説を訪ねて（下）

い、と認めたといわれる。

一方、トレド大司教のマルケス・デ・ビリャナは、いったんは大司教と組んで反乱に加わるが、再びエンリケ4世のもとにつき、自分の利害から、イサベルとポルトガル王アルフォンソ5世を結婚させようと図る。ところが、イサベルはアラゴンの王子フェルナンドとの結婚を望み、トレドの大司教もイサベルをフェルナンドと結婚させようとする一派に加担する。そこで大司教は、王家の結婚に必要な、法王が発行する婚姻許可書を偽造して、これを読みあげ、王の承認なしにバリャドリで二人を結婚させてしまう。怒ったエンリケ4世は、トロス・デ・ギサントの講和を無効とし、再び娘のホアナを継承者と宣言する。一方、イサベルの実力を恐れはじめた昔の反乱者たちが、今度はエンリケ4世側に寝返って、イサベル側と争うことになる。トレドの大司教は今度はポルトガルのアルフォンソ5世と結託し、アルフォンソはホアナと結婚してカスティリャに攻め込んだ。しかし、フェルナンドはアルフォンソ軍と戦い、1476年3月1日、バリャドリとサモラの間にあるトロで勝利を収め、反対派は征定される。そして、マドリガルで開かれた議会で、イサベルはカスティリャの正当な女王として承認される。こうして、1474年、女王となったイサベルのカスティリャ王国と、フェルナンドのアラゴン王国の合体による治世がはじまり、1480年にはトレドで議会が開かれる。

この時代のスペインにおける最も大きな出来事は、1492年のイスラム最後の王国グラナダの陥落、そして、くしくも同じ年に行われた、イサベル女王の支援によるコロンブスのアメリカ発見、また1478年にこの両王によってトレドに創設された異端審問制度、そしてユダヤ人の追放をあげることができる。

さて、フェルナンドとイサベルの間に生まれた王子は若くして死に、娘ホアナの息子カルロス（1502～1558）が次期スペイン王となる。このホアナはオーストリア、ハプスブルグ家の神聖ローマ皇帝マクシミリアン1世の息子フェリペ1世に嫁いでおり、従ってこの息子カルロスは、スペイン王カルロス1世であると共に、1519年にはドイツ皇帝カルロス5世として即位し、“その帝国に太陽が沈むことがない”といわれた広大な領土（スペインとその植民地及びフ

ランドル、オーストリア)を支配することになる。

このカルロス5世の時代に、トレドのアルカサル(王宮)の再建がアロンソ・デ・コバルピアスの設計に従って開始される。当時、トレドには、おそらくスペインの他のどの都市におけるよりも数多くの立派な住宅があったといわれる。しかし、1561年、カルロス5世の息子のフェリペ2世が都を最終的にマドリードに移したことにより、トレドは遂に没落し、人々は去り始める。政治、文化の中心地であった頃の華やかさは過去のものとなり、一地方都市の地味な静けさの中に沈み込んでゆく。一方、スペイン全体としても、新大陸からもたらされる富は、カルロス5世の戦争に次ぐ戦争の費用に喰い潰され、フェリペ2世の時代の無敵艦隊(この名前はイギリスが皮肉をこめてつけたものである)の敗北も加り、国運は次第に傾いてスペインは斜陽の道を歩きはじめる。

現在立派に補装された広い道路、マドリード街道から入ってまっ先にぶつかるのがピサグラ新門である。車はこの門の右手に城壁に四角くあけられた入口から、城壁内部の岩山に築かれた町に入るようになっているが、この狭い入口をバスがぎりぎり一杯に通ってくる姿は、やはり現代のトレドの姿である。このピサグラ新門はグレコ・ローマン様式で、カルロス5世の命令によって、1550年に着工され、後フェリペ2世によって増築、一部改築されている。その時に、現在この城門のシンボルとも言える双頭の鷲に抱かれたカルロス5世の紋章がつけられた。伝説によれば、この門が建てられる以前のイスラム時代に、グレデロスの門と呼ばれる城門があったと言う。マドリード側にあるこの二つの丸い塔にはさまれた入口を、頭上にカルロス5世の大きな紋章を眺めながらくぐると、中庭に出る。この中庭はグラン・パティオ・デ・アルマスと呼ばれ、岩山側の口の壁には次のようなセルバンテスの言葉がやきつけられたタイルがはめ込まれている。

Toledo: Peñascosa pesadumbre, Gloria de España y Luz de sus ciudades.

Cervantes

古都トレドの歴史と伝説を訪ねて（下）

（トレド：岩山の重み、スペインの栄光、そのすべての町の誇り）

岩山側の奥の門にも二つの塔があり、この塔の上には、まだ真新しいタイルでできた瓦ぶきの山型の屋根がつけられている。この山型の屋根は、前側の門の塔よりも高い位置にあるので、マドリード街道からもよく見える。このタイルの瓦には、白地に紋章を抱える黒い鷲が染め出され、かなり遠くからでもその姿がはっきりと浮き上って認められる。この前側の門と山側の門とは両側を城壁でつなぐれ、中庭を囲む部分の側は緑のつたにおよわれて非常に美しい。そしてマドリード側から見て右手の城壁は更にビザグラ新門にまで延び、これと一つになっている。

ビザグラ新門をくぐり、右にバルマルドン門を見ながら坂道を上ってゆくと、先に述べた太陽の門に出るわけである。またシッドの馬がひざまづいたというクリスト・デ・ラ・ルス寺院はこの右手である。あまり人通りのないクリスト・デ・ラ・ルス通りを更に上ると、アルフィレレス通りに出る。このあたりは頭上にバルコニー式のガラス窓が並んで張り出している静かな住宅地だが、壁がくずれ落ち、すでに住む人もなくなったような廃屋も多い。この通りには、ビルヘン・デ・ロス・アルフィレリートス（ピン留めの聖母）と呼ばれるマリア像があり、昔、良縁を望む娘たちがお参りしてピンを奉納したことから、アルフィレリートス（ピン留めの通り）と名付けられている。このマリア像をさがしてみたがどうしても見付からず、通りがかりの住民らしい老人を呼びとめて尋ねてみた。今はそのマリア像はなくなっている、という答だったが、言われた場所に行ってみると、鉄格子と金網を張った古びた壁がんと、小さなひさしが残っている。Mater dolorosa（悲しみの母）とラテン語でしるされた木の十字架が淋しく取り残されて、当時の清い信仰心のすたれを物語るようであった。この信仰には次のような伝説がある。16世紀、トレドに愛し合う男女がいたが、男はカルロス5世の軍隊の隊長として出征する。残された娘は毎晩恋人の無事を祈るために、この聖母にお参りした。こうして夜明けまでお祈りするのだが、時々つい眠り込んでしまう。それで、眠ってしまわないように、つき添いの女性に時々ピン留めで突いてくれるように頼んだ。そしてお祈りが終

佐藤

ると、そのピン留めを彼女の誠実の証拠として聖母に供えた。恋人は無事戦争から戻り、二人は目出度く結ばれた。そして以来、トレドの未婚の女性たちの間に、良い恋人を得られるように、この聖母にお祈りし、ピンを奉納する習慣が生まれた、と言う。

このアルフィレリートの通りは、シリエリーア通りにつながっているのだから、ここから一度ソコドベル広場へ戻ることにして。広場の東側に開けられたイスラム風のアルコ・デ・ラ・サングレ（血のアーチ）をくぐり、階段をタホ川の谷間の方へ向って降りると、左側にオスピタル・デ・サンタ・クルス（聖十字架病院）がある。ここは、カトリック両王、フェルナンドとイサベルの時代に、ペドロ・ゴンサレス・デ・メンドサ大司教によって、捨て子を育て、教育するために設立された建物で、優美な正面は、初期プラテレスコ様式で、全体はスペイン・ルネサンス様式の代表的な建造物の一つとされている。現在は考古学博物館になっていて、内部には、有史前やローマ時代の遺物、ベガで発見されたローマ時代の石棺や、2世紀頃の四季をあらわすモザイクの床、あるいはゴート時代の遺物、バンバの碑石の断片、それにイスラムやユダヤの遺物などが陳列され、非常に興味深い。この周辺には、古くはゴート王やイスラムの貴族の邸宅があったといわれるが、現在はなんのへんてつもない3階ほどの建物が立ち並んでいるにすぎない。トレドにはセルバンテスも一時住んでいたことがあり、このあたりはセルバンテスの“ラ・イルストラ・フレゴナ”の舞台になった、ラ・ポサダ・デ・ラ・サングレ”（血の宿）があったが、残念なことに市民戦争で破かいされたという。

更に坂を下ってゆくと、タホ川の渓谷にかかるアルカンタラ橋に出る。この橋はトレドで最も古いもので、国の重要文化財に指定されている（なお、トレドは町全体が重要文化財である）。この橋の最初の建設はローマ人によるとされ、当時のトレドの町から南へ延びる石畳で舗装された道路はこの橋を渡るようになっていた。橋の脚台の積み石には、ローマ時代のもの、そしてゴート時代のものがいまだに見られると言う。この橋は866年にアラブ人によって再建されたが（アルカンタラはアラビア語で橋を意味する）、1257年の大水で流さ

古都トレドの歴史と伝説を訪ねて（下）

れ、翌年アルフォンソ10世賢王によって再び建てられ、以後何回か修復されている。この橋は1911年までアルバ公爵家の所有で、渡るには渡橋料を支払わなくてはならなかったが、もちろん今は無料で歩行者専用となっている。

ソコドベル広場から、おなじみの商店街、コメルシオ通りを通過して、再びカテドラルに向う。このカテドラルの建っている通り、厳密には回廊の西の部分に接する通りはオンブレ・デ・パロ通りと呼ばれているが、この通りにはおもしろいいわれがある。

トレドの翻訳工房で働いていた著名なアラビア語の翻訳家にクレモナという人が居たが、彼の職人にホアネロ・トリアノと呼ばれる人物がいた。彼は、タホ川の水をトレドに汲み上げる装置を作った人だが、またオンブレ・デ・パロという人形を作った。これは日本でいう“からくり人形”だが、ホアネロはカテドラルの近くに住んで居り、彼の家から大司教の家までこの人形を歩かせて、パンと肉をもらって自分の家まで戻って来させた、という。そして、その人形は、もらう時にちゃんとお辞儀をしたのだそうだ。そこでこの人形の歩いた道を、オンブレ・デ・パロ通り（木製人形通り）と名付けたということである。トリアノは、後にカルロス5世がユステの僧院に蔭居した時に王について行ったといわれているが、それはこの人が時計のメカの大家であり、カルロス5世が大の時計マニアであったからのようだ。

カテドラルからまっすぐ西に向ってゆくと、タホ川の近くにサン・ホアン・デ・ロス・レイエス修道院がある。この修道院は、1477年のトロの戦勝記念にカトリック両王によって創設されたものである。正面は実に美しいゴシック・ルネサンス様式で、そこには7人の聖人とフェルナンド・イサベル・カトリック両王の盾をかたどった紋章の彫刻がひとときわ目をひく、また外壁には、黒い鎖が何百も装飾のようにつけられているが、実はこれは、イベリア半島における最後のイスラム王国、グラナダの降伏（1402年）によって釈放された、グラナダのキリスト教徒の捕りよたちがつながれていた鎖である。この教会の名前サン・ホアンは、カトリック両王の守護聖人、サン・ホアン・パウチスタの名をとったもので、両王の墓所として作られたが、実際には両王の遺骸はグラナ

ダの大聖堂に安置されている。

このサン・ホアン・デ・ロス・レィエス修導院から細い道をだらだらと下ると、立派なサン・マルティン橋に出るが、残念ながら橋の手前の道は観光バスの駐車場となっていて、橋に行くにはその脇をやっとすり抜けて行かなければならない。この橋の起源はビシゴートのバンバの時代といわれるが、現在のものはアルフォンソ10世賢王の時代に建設されたものといわれる。その中央のアーチはペドロ1世とトラスタマラ兄弟のエンリケとの戦いにおける包囲戦で1368年意図的に破かいされたが、ペドロ・テノリオ大司教が後に復興したという。伝説によると、この橋を建てた建築技師は計算をまちがえていたが、その建築がかなり進んだ頃に、誤りに気付いた。つまり、構築用の木の枠をはずすと、計算違いによって橋が落ちてしまうということがわかった。彼の妻にそのことを打ち明けると、彼女はある夜、そっと家を抜け出して木組に火をつけた。橋は落ち、建築家はもう一度橋を建て直すことを命じられ、名誉を傷つけられずにすんだという。この技師の住んでいたといわれるサント・トメ寺院の近くにカリエホン・デル・アラリフェ（技師の路地）がある。

現在の橋は18世紀に復興されたもので、山側のパラペットのついた塔からトレドを囲む城壁が左右に延びている。外に向いた面にはアーチの上にサグラリオの聖母の像があり、橋側にはトレドの紋章が刻まれている。また川を渡った側の出口もパラペットのついた塔になっており、岩山に向いた面にサン・フリアン大司教の小さな像が据えられている。

さて、最後に、ソコドベル広場のすぐ南に上ったところに立つアルカサルに行ってみよう。この場所はトレドで一番高いところで、ローマ時代から、あるいは前述の伝説によると、もっと古い頃から要塞が築かれ、西ゴートの時代、イスラム時代と、この場所には何度も要塞が再建されている。その後、アルフォンソ6世が当時のイスラムの要塞を復興し、エル・シドの導いる警備隊をこゝに置いた。更にカルロス5世はその要塞をもとに、カテドラルの建築家アロンソ・コバルピアス、ホアン・デ・エレラなど当時の有名な芸術家に大邸宅を建てさせたという。しかし、この建物も何度も戦争で破かいされ、1867年に復

古都トレドの歴史と伝説を訪ねて（下）

興された建物は陸軍兵学校として使われていたが、それも1936年、内戦での共和軍とナショナル軍との攻防戦で大破された。現在では再びほとんど完全に復興され、内部は内戦記念館のようになっている。

さて、私達の長いトレドの歴史散歩を終え、出発点のソコドベル広場に戻ろう。今も昔と変わらず人々がたむろし、ドンキ・ホーテの場面をモチーフとするタイル画をあしらったベンチのほとんどすべてが老若男女に占領されている。この広場がいつから存在しているかはわからないが、すぐ近くにアルカサル、つまりケルト・イベロの時代にさかのぼる頃から次々と要塞が建てられた地があるからには、多分その時代時代の人々が、それぞれの時代の服をまとい、それぞれの想いを抱いてこのあたりを往き来したのではなかろうか。支配者が、軍人が、僧侶が、学者が、芸術家が、町の人々が、外国人が、長い歴史を通してそれぞれの足跡をどこかに残しているに違いない。

トレドの夕日は美しい。大きな真赤に燃えるような太陽が、サン・ホアン・デ・ロス・レィエス修道院を黄金色に輝かせながら、サン・マルチン橋の彼方にゆっくりと沈んでゆく。それはあたかも420年前に栄光の座を静かにおりて行ったトレドを象徴するかのようである。

(1987年9月)

文献目録

- Juan Campos Payo: Esto es Toledo. 1983, Toledo.
Francisco Zarco Moreno: Toledo, Madrid.
P. Riera Vidal: Un día en Toledo, Toledo.
Julian Abad Marigil: Toledo, 1985, Madrid.
Julio Alemparte: Andanzas por la vieja España, 1961, Madrid.
Editorial Escudo de Oro: Todo Toledo, 1984. Barcelona.
Diccionario Básico Espasa, Espasa-Calpe, 1980, Madrid.
Enciclopedia Sopena, Sopena, 1980, Madrid.
Enciclopedia Larousse, Larousse, 1978, Paris.
Diccionario de Historia de España, 1968, Madrid.
Gran Enciclopedia RIALP, Ediciones RIALP, S. A. 1975, Madrid.
世界史事典, 平凡社, 1983。